

イスラーム美術における中国美術の影響 ——トプカプ宮殿所蔵「サライ・アルバム」から——

ヤマンラール水野美奈子

文明史学研究室

イスラーム世界では、8世紀ごろから16世紀ごろまで、隣接する中国の美術や文化の影響を受けた。イスラーム世界では初期から、中国の陶磁器や絹織物などに対する憧れが強く、また中国絵画も高く評価されていた。

中国の美術品や文物は、初期には交易や献納品などとしてイスラーム世界に伝来したが、13世紀中期にモンゴル民族がイスラーム世界を制覇し、イランにイル・ハーン朝というモンゴル王朝を確立すると、中国の美術工芸品が大量にイスラーム世界に入り、伝統的なイスラーム美術に新風を吹き込んだ。その後のティームール王朝も中国の装束や文物を好み、イスラーム世界における中国趣味が広く伝播した。したがってイスラーム美術には、日本美術にもなじみの深い絵画のテーマや図案、文様が少なくない。

中国文化圏を挟んで、西のイスラーム世界、東の日本・朝鮮の文化圏が、緩やかな一つの美術・文化圏を形成していると言っても過言ではない。

本談話会では、科研費「イスラーム地域研究」の研究分担者である発表者が、トプカプ宮殿美術館との共同研究プロジェクトとして研究している、「サライ・アルバム」(宮廷詩画帳)を例にとりながら、道釈画、中国人物図、麒麟・鳳凰・龍などの中国の想像動物、風景画など中国的要素を示す作品をスライドで紹介した。

私たちが研究対象としている2冊の「サライ・アルバム」(登録番号、H. 2153、2160)は、白羊朝(1378-1508)の宮廷で、当時残存していた貴重な絵画の断片や、能書家の書の断片を集めて台紙に貼って製作されたもので、書画合わせて約1500点に及ぶ。それらは14・15世紀のイスラーム世界の絵画や書道の動向を知る上で貴重な作品である。

この科研費の研究成果は2003年に「サライ・アルバム」の総カタログ出版および研究書出版として発表される予定である。